

MMLSの誕生と変遷 -「SFCらしさ」の恩恵-

こいし あつこ
古石 篤子

(慶應義塾大学名誉教授)

湘南藤沢メディアセンターにはMMLSと呼ばれる空間がある。これはマルチメディア・マルチリンガル・スペース (Multimedia Multilingual Space) の変則的略称であるが、本稿はその誕生と現在までの歩みの物語である。『MediaNet』本号の特集は湘南藤沢キャンパス (SFC) 開設記念ということなので、種々の点で「SFCらしさ」を象徴しているこのMMLSについて語りたと思う。そして、最後に少しだけ今後の夢にふれよう。

1 MMLSの誕生

筆者はSFC開設時に同僚と共にフランス語セクションを立ち上げ、昨年3月に定年を迎えたが、SFCの特徴のひとつは常にパイオニアたらし、変化を恐れないところであろう。どのようなことでも、良いとなればすぐに実行に移される。外国語カリキュラムもあるべき姿を求めて、創設以来目まぐるしく変化してきたしⁱ、MMLSもその例にもれない。

あれは1999年7月のこと、ゲストハウス (キャンパス内宿泊施設) での朝食時、故高橋潤二郎理事と偶然一緒になった。当時、学習者オートノミー育成のためのマルチリンガル・スペース構想を抱いていた私は、きっと熱く話したのだと思う。その日のうちにキャンパス事務長から電話をもらい、メディアセンターとITC関係者に対して、説明のためのプレゼンテーションをするよう求められた。

こうして春学期の授業もほぼ終わった7月末に説明会が開かれ、外国語の自律学習空間構築のための外国語教員 (数名)、メディアセンター、ITCの三者一体のプロジェクトが動き出したのである。その後、両学部合同運営委員会の承認を経て、正式に学部プロジェクトとなったのだが、関係者にとっては夏休み返上の熱い夏になった。そして、機材の搬入・設置、教材・図書・新聞・雑誌の配架、ソフトのインストール等を終了し、なんとか秋学期開始の9月末オープンにこぎつけたのである。企画からとりあえずの完成までなんと2か月足らず!

このスペースの詳細については、以下2を参照さ

れたいが、実現までのスピード感とともに、教員と職員の緊密なコラボレーションも「SFCらしい」のではないだろうか。私たちの教育コンセプトの実現のために努力して下さる職員の方々との協働は、実に新鮮な経験であった。

また、そもそも本や雑誌などの紙媒体資料のみでなく、ITやAV機器が重要な位置を占める外国語学習空間を、湘南藤沢メディアセンターは積極的に受け入れてくれたのだが、そのこと自体、この施設が「図書館」ではなく「メディアセンター」という名称にふさわしく、「新しいコンセプトにもとづく情報施設」ⁱⁱをめざしていたからだと考える。

2 SFCの外国語教育とMMLS

SFCの外国語教育は「多言語主義」「アジア言語重視」「発信型の外国語」という3つの高い理念を掲げて出発した。そして1999年には、それまでの10年間に行った多くのことの蓄積の上に立ち、ハイテクキャンパスSFCだからこそできる21世紀の外国語教育の新たな方法論を打ち立てるべき時期にきていた。MMLSもその試みのひとつといえる。

思えば外国語学習・教育は科学技術の進歩と歩みを共にしてきた。テープレコーダーやカセットレコーダーの発明はLL (語学ラボ) を、コンピューターの発明はCALL (Computer Assisted Language Learning) を可能にした。1990年代は日本でも



写真1 MMLS第一世代

CALL教室がブームとなり、70年代の語学ラボを彷彿とさせるような状況であったⁱⁱⁱ。しかし単なるIT化は言語習得には何ら寄与しない。発想を逆にして、「言語習得には何が必要か」から出発して学習環境を創ってゆくことを私たちはめざした。

MMLSは、言語習得は個人の学習・認知活動によるもので、主体はあくまで学習者自身であるという基本的な考え方にに基づき、「オートノミーの育成(自律学習のススメ)」をその第一の目標としている。学習者は次のような多様なメディアを駆使して自らの学びを育てることを学ぶ。こうして、当初の「マルチリンガル・スペース」は「マルチメディア・マルチリンガル・スペース」と呼ばれることになった。

これらのメディアは次のコーナーに分類される。

- (1) オーディオ・コーナー (カセット・CD・MD)
- (2) AVコーナー (TV・ビデオ・海外衛星放送)
- (3) PC/WSコーナー (インターネット・CD-ROM・Mall III)
- (4) 読書コーナー (外国の新聞/雑誌・教材資料・辞書・事典類)

この他に、「実践コーナー」(小グループでの会話実践)や「教材制作コーナー」も構想された。

このように、単にPCが並んでいるCALL教室ではなく、多様なメディアを学習者が自由に選んで使える空間というのは当時は画期的だったし、今でここどこでも行えるTV会議も、Webカメラ設置のPCを使ってMMLSで特権的に行うことができた。(これは第二、第三の目標「キャンパスグローバル化」と「専門教育とのドッキング」につながる。)要するにMMLSは、例えば「フランス語を身につけたい」と思う学生がそこに来さえすれば、その時点で考えるすべての学びのツールがハードもソフトも一堂に揃っている空間であったのである。

当初フランス語だけであった言語種も徐々に増え、中国語、ドイツ語、イタリア語が加わり、現在はそれにスペイン語、ロシア語や英語なども入っている。

またCD-ROM教材など、当時一般には使い慣れないメディアも多かったため、MMLSコンサルタントを配置して利用者の便宜を図った。その他、利用者が自分で学びたい項目をMMLSのホームページ上で検索し、学習目的に合った教材・課を選べるようにMMLS検索リストも作成した^{iv}。



写真2 MMLS第二世代

3 科学技術の進歩とMMLSの変遷

第一世代のMMLSにはメディアセンター3階奥のグループ学習室が充てられ、間に合わせの什器類で出発した。その後、2004年春に2階レファレンス・デスク前の「一等地」に移設された第二世代のMMLSは少し狭くはなったが、建築・環境学の池田靖史研究室の大学院生のデザインによる居心地のいい空間に生まれ変わった(写真2参照)。

空間が縮小した背景には、科学技術の長足の進歩により、カセットデッキ等のように設置から数年も経ずに不要になったり、使えなくなったりしたものがある上に、デジタル機器のモバイル化やユビキタス化が進み、多様なメディアの使用に特別な空間が不要になったことがある。TV会議でさえ、ふつうのPCでスカイプなどを使ってできる時代になった。そのため、学生の使用頻度の高い各種検定試験用資料や辞書などを充実させたりもした。

しかし時代の流れとともにMMLSは徐々に活気がなくなりつつあった。だが、これもまた「SFCらしい」のだが、MMLSの再活性化のアイデアは学生から出てきた。息づく「半学半教」の精神に助けられ、「メディアセンターフレンズ」(以下、MCF)として公募された彼らは、留学生交流や研究会展示、そして外国語研究室SA (student assistant)^vによる外国語履修相談やタンデム学習など、ユーザーの視点から様々な活動を提案し、実行に移してくれている。MMLSはたっぷり「SFCらしさ」の恩恵を受けて生まれ、そして今それによって生まれ変わろうとしている。なんと幸せなことか!

本稿を閉じるに当たり、MCFとともにMMLS第三世代を構想して、少しだけ未来に目を向けてみたい。

SFCの外国語教育には、おそらく慶應義塾の他キャンパスや、そして他大学にも無い「大きな宝」がある。それは各言語の共同研究室である。そこにはネイティブも含めた教員(専任/非常勤を問わず)と、SAやTA (teaching assistant: 院生) が常駐しており、授業準備や情報交換、そして歓談の場となっている。キャンパスのなかのこの「異言語空間」では、生きた外国語が日常的に飛び交っているのだ。ただ、これらの共同研究室はそれぞれバラバラに存在しているので、MMLSはそれらの出会いの場、関係者がその価値を再認識できる場となるといいと思う。MCFが提案実行したSAによる外国語履修相談はその第一歩としては実に名案であった。その他に留学説明会などを共同で行うことも考えられる。

次に、当初の目標のひとつ「キャンパスグローバル化」推進の一環として、「MMLSどこでもドア」はどうだろう。TV会議システムを利用してMMLSを国外他大学の研究室と恒常的につないでおくのである。MMLSの壁の一部に例えば、フランス・パリ第7大学のある研究室を等身大に映しておく。あちらでも同様の仕組みを作っておき、フラッとその場に立ち寄った人同士で、「やあ、こんにちは。今日はそちらの天気はいかが?」とか、「最近の○○の事件では大変だったけど、その後の様子はどう?」などと会話が弾むと楽しいだろう。日替わりで、曜日毎につなぐ先を替えることにするのがよい。

同じシステムを使って、「MMLSワールド講演会」もいだろう。例えば、中東情勢や原発問題などのホットな話題について、現地の教員や学生の話聴き、その後に意見交換するのだ。逆に、こちらの話聴いてもらうのもいい。通訳をつければ、アラビア語やドイツ語の講演でも誰でも参加できる。企画は各言語の共同研究室が毎年1つずつ提案し、講演会は毎月1回開催する。世界に目が広がり、真のグローバル人材育成に貢献すること間違いなし。

このようにMMLSはまだ未知の可能性を秘めている。今後どのように発展していくのか、楽しみに見つめていよう。

注

- i 古石篤子 (2005) 「SFC外国語教育の変遷」『慶應SFCの現場から 外国語教育のリ・デザイン』(平高・古石・山本(編)) 慶應義塾大学出版会, pp.28-51.
- ii 高橋潤二郎 (1991) 「湘南藤沢メディアセンター所長就任に当たって」*KULIC*, no.25, p.1.
- iii SFCでも、メディアセンター1階のオープンエリアに74台のワークステーション設置の外国語学習エリアがあった。
- iv MMLSの詳細については次を参照。古石篤子(編著)(2000)『マルチメディア・マルチリンガル・スペース(MMLS) 報告書』慶應義塾大学湘南藤沢学会。
- v SA制度の充実もSFCらしい。学生と教員が同じアカデミックコミュニティの一員であるという意識の涵養に役立っている。